

危険予知訓練 (KYT) と危険予知活動 (KYK)

1. 危険予知訓練 (KYT) とは
危険のK、予知のY、訓練 (トレーニング) のTをとって「KYT」ともいわれる。「活動」の場合はKをとって「KYK」又は「KY活動」と呼ばれている。
2. 危険予知活動 (訓練の目的)
職場や作業の状況のなかに潜む「危険要因」を職場小集団で話し合い、わかりあって、行動する前に解決することを習慣づける。「危険要因」とは労働災害や事故の原因となる可能性のある不安全な状態や不安全な行動をいう。
安全を早く、正しく先取りする。
3. 危険予知活動の進め方 (基本 4 ラウンド方法)

ラウンド	進め方の要点	備考 (留意点等)
1 ラウンド (どんな危険があるか) 潜在危険の発見・摘出	<ul style="list-style-type: none"> ○危険の要因をはっきりと (…なので…となる) ○いきなり対策めいた意見が出たら、「それはなぜ必要か」問いかえす。 ○ブレーン・ストーミングで考えられる危険を漏れなく (質より量) 	<ul style="list-style-type: none"> ○はっきりしていないと対策が具体的に出せなくなる (抽象的になる) ○「…なので」がはっきりしていないときは「なぜそうなるのか」を問いかえす。 (例)「玉掛けワイヤが切れて吊荷が落ちる」に対しては、「なぜ切れたか？」 ・古い -----> 点検 ・細い -----> 選定 ・かけ方が悪い -----> 再指導
2 ラウンド (これが危険のポイントだ) 重要危険の絞りこみ	<ul style="list-style-type: none"> ○危険の頻度又は致命度を考えて ○絞りこんだ以外の危険への対策指示を忘れずに 	<ul style="list-style-type: none"> ○リーダー (職長等) が一方的に決めてよい。(この段階であまり時間をかけない) ○あとでリーダーより簡単に指示すること。
3 ラウンド (あなたならどうする) 対策の検討・樹立	<ul style="list-style-type: none"> ○具体的で実行可能な対策を対策を現場で実行しやすくするため具体的な内容・方法を明確に ○対策は「否定的」(…しない)ではなく、「前向き」(…する)な表現で 	<ul style="list-style-type: none"> ○ (例) 「立入禁止にする」 (バリケード、単管柵、トラロープ、監視人配置、等) ○ (例) 「吊荷の下に入らない」ではなく、「吊荷から〇m以上離れる」
4 ラウンド (私たちはこうする) 行動目標の設定	<ul style="list-style-type: none"> ○対策のポイントを簡潔に表現して全員で指差唱和 「…ヨシ！」又は「…の…ヨシ！」 	<ul style="list-style-type: none"> ○現場ですぐ実行すべきこと (必ず守るべきこと) を相互に確認しあって ○作業前にまず気合いを入れて (大声で、元気よく)

2. 2 ラウンド方式での進め方

短時間で実施するために2ラウンド方式がある。この方式は基本である4ラウンド方式の1R+2Rを「危険のポイントはなにか」にまとめて1ラウンドとし、3R+4Rを「私たちはこうする」にまとめて2ラウンドとして行う方式。

- | | |
|------|---|
| 手順-1 | (1R) 危険のポイントはなにか
作業の中で最も危険と思われる危険を出し合う |
| 手順-1 | (2R) 私たちはこうする
ワンポイントを唱和する
行動目標となる対策をたてる |

例 今日作業 - 「単管玉掛け作業」

危険のポイント 1R - 荷に吊り込まれて落下する
私たちがこうする 2R - かいしゃくロープで誘導する
(ワンポイント) かいしゃくロープ誘導ヨシ!

危険予知活動は、基本の4ラウンドと短縮の2ラウンドでの方法がある。又、TBM時に実施する場合と作業場所で実施する現地KYがあり、ほかに巡回中に作業員へ今日のKYはどうだったか声をかける「問いかけKY」などがある。作業環境、機材等を指差呼称で確認点検後、2ラウンド方式で現地KYを実施することもある。また、リスクアセスメントを導入している場合はリスク評価の高い作業ステップを優先的に危険予知し、対策をたてる。

〈再確認〉

○指差し呼称 (唱和)

